

新本館棟竣工

雲南市立病院 副院長 佐野 啓介

平成30年3月3日、新本館棟竣工式典が挙行された。平成24年からの基本構想を経て、平成27年9月から始まった病院建設工事は、2年半の歳月をかけ、新本館棟完成という節目を迎えた。従来の病院の外観とは異なり、1・2階はたたら製鉄をイメージした赤褐色、3階から上層は八雲の空をイメージした淡い白色で配色された、まるで美術館を思わせる美しい新病棟が完成した。

吹き抜けの玄関ホールで執り行われた竣工式には総勢180名の方にご列席いただき、盛大な式典となった。式典に先立ち、海潮山王寺神楽社中の皆さんによる神楽「簸ノ川大蛇退治」が披露され、華やかなオープニングとなった。式典では、速水雄一雲南市長、松井 讓病院事業管理者、藤原信宏雲南市議議長が挨拶を述べ、療養環境が格段に改善された新本館棟を軸に、雲南圏域住民の健康と生命を守るため、全力で医療を提供する覚悟を示した。来賓の皆様からの祝辞では、雲南市ご出身である竹下 亘衆議院議員からふるさとへの熱い思いと病院に対するエールをいただき、病院完成の喜びを改めて感じるとともに、身の引き締まる思いであった。フィナーレでは当院が誇る総勢25名の合唱隊とともに参加者全員での唱歌「ふるさと」の大合唱がホール全体に響き渡り、熱いものが込み上げてくるのを感じた。翌日3月4日の新本館棟一般見学会には好天にも恵まれて2,200人もの来場者を迎え、地元住民の皆様への病院に対する期待の高さを知ることができた。

思い返せばここに至るまでには新医師臨床研修制度の導入に伴う急激な医師不足といった厳しい道のりがあった。私が当院に赴任した平成15年には診療局の医師数は34名であった。内科には消化器、腎臓、循環器、内分泌を専門とする10名を超える医師が在籍していた。また、内科以外にも20-30代の若い医師が多く、医局は活気に満ちていた。平成16年の新医師臨床研修制度の導入後、大学各医局の事情により、診療局の医師の多くが大学病院、または他の関連病院への異動となった。内科医師は常勤医師1名を除いて全員が退職という病院存続にかかわる危機的な状態となった。この危機を乗り越えるため他病院の院長経験者2名を新たに加え、平均年齢50歳を超えた3名での内科診療の再スタートとなった。また内科医不足を補うため、外科系医師による総合診療科を県下に先駆けて立ち上げ、内科医師と協力し入院、救急外来に対応した。その他の科では、時期を前後して、精神科、麻酔科、皮膚科、泌尿器科、眼科、放射線科の常勤医師がいなくなり、数年の間に医師数は半数の17名まで減少した。しかしこの苦難に際して、病院事業管理者、院長の医師獲得のためのご努力に加え、「がんばれ雲南病院市民の会」などの市民団体の皆様のご支援や、雲南市を中心に活動しているNPO法人などによる各方面への情報発信により医師数はゆっくりだが徐々に増加傾向に転じた。そのような状況の中で、沖縄の離島である西表島と南大東島から2名の総合診療医が赴任し、平成28年4月に地域ケア科を開設できたことは大きな一歩となった。平成28年8月からは訪問診療を開始し、開業医、看護師、介護士、ケアマネージャー、他福祉関係者との多職種連携を緊密に図る活動を実施している。そして新病棟の完成を迎えた平成30年春には医師数24名まで回復し、内科を中心に若手医師も増え、医局も以前の活気を取り戻しつつある。

平成30年3月22日の新本館棟開院に向け、3月17日から21日の5日間にて引っ越しを行った。私自身、病院の引っ越しという大イベントは初めての経験であり、思い出深いものとなった。19日には板持看護部長の指揮の下で、入院患者さまの移転が行われた。何度も練習を重ねたシミュレーション通りに、大きな混乱もなくスムーズに移転を図ることができ、夕方には無事に新病棟での業務に移行できた。引き続き22日の外来オープンに向けて各部署の設営、外来運用リハーサルが行われた。私の外来はというと、新本館棟の南西の角部屋に位置し、南側の大きな窓からの日差しもあり、こぢんまりとしているが結構居心地が良さそうである。

開院日には、市・議会・施工関係者をはじめ多数の方にご参加をいただき、新本館棟開院セレモニーとして、速水市長、松井病院事業管理者、藤原議長の挨拶に続いて、テープカットが行われた。こうして我々の雲南市立病院新本館棟は平成30年3月22日に雲南圏域内の中核病院、地域を支えるための災害拠点病院として新たな門出を迎えた。「地域に親しまれ、信頼され、愛される病院」として、この立派な新本館棟に相応しい医療を提供すべく心新たに平成30年の春となった。